

ルールの厳格な適用のみが審判の役割か：ショートトラックスピードスケートにおける不正スタート判定を事例として

佐々木拓（金沢大学）

本提題発表では、発表者が国際審判員資格をもつショートトラックスピードスケート（以下 STSS）における不正スタートの判定揺れという問題を題材に、スポーツにおける審判の役割と「フェアネス」について考察する。陸上競技と同様、STSS 競技では競技者はスタートに際してスタート姿勢をとった後、号砲までその姿勢で静止し、それを維持しなければならない。静止後に身体の一部を動かすことは不正スタート（一般には「フライング」と呼ばれる反則）とされる。とはいえ、オリンピックにおいてさえこの反則の適用が見逃されているような事例が見られるし、国内大会となるとその頻度はより高くなるだろう（陸上競技であればおそらくこれは許されないだろう）。本発表では、STSS ではまれとはいえ、この「見逃し」が誤審として非難されるべきか、それともスターターの自由裁量なのかという問題設定のもとで、スターターに一定の自由裁量が許容可能であることを主張する。

誰の目にも明らかな反則事例を審判員が自由裁量のもとで意図的に見逃すことは、一見したところ、審判は公平でなければならない、厳格にルールを適用しなければならないという、われわれのスポーツに対する一般的な見方に反しているようにも見える。他方で、このような自由裁量を認める理由として、ある種の功利性をあげることもできよう。確かに、スターターによってレースが頻繁に中断されることは観客の興味を削ぐし、また大会運営上も効率が悪い。これを STSS という競技の限界、もしくは内的な規範と捉えることもできようが、それはとりわけ競技者や観客が審判員に対して求める公平さに対立するかもしれない。となれば、やはり審判員はルールの適用に際して自由裁量を認められる余地はなく、本来的には厳格にルールを適用して不正スタートを反則とみなすべきであるにもかかわらず現状はそうになっていない、つまり、現状の STSS はスターターの個人的な判断（そうでなければ能力の不足）によってフェアネスの確保に失敗しているということになるのだろうか。

本発表では、道徳的責任に関して近年展開されている T・スキャンロンの非難の理論を用いてこの対立を分析する。すなわち、不正スタート判定をある種の非難とみなした上で、スターターと競技者、さらには観客との間に成立している関係性の観点からこの対立を調停する。また、関係者が互いに持ち合う意図と期待というスキャンロン流の関係理解のもと、STSS においてスターターおよび競技者、さらには観客に合理的に期待できる意図とは何かを考え、そこから許容可能な自由裁量の基準を導出し正当化を行う。最後に、競技団体に属する審判員という観点から、この関係性に対する配慮の必要性和、それに基づいた審判員の役割について考察を加えたい。

本発表のテーマは STSS という競技人口の比較的少ない競技の、しかもスタートという非常に限定的な場面を事例としている。とはいえ、本発表で展開される議論の核心は、例えばサッカーにおけるファウル判定のような、他の競技における自由裁量権の問題にも十分適用可能なものである。この可能性についても時間が許すなら論じるつもりである。

#### 参考文献

- ・ Scanlon, T. M. 2008, *Moral Dimensions: permissibility, meaning, blame*, Belknap Press of Harvard University Press.